地域医療支援センター・総合診療科が新設

奈良県立医科大学付属病院の総合診療科で教授として勤務されていた、西尾健治医師が令和5年4月より、市立病院地域医療支援センター長として就任いただいています。今回、新設された総合診療科についてお話を伺いました。

総合診療とはどのようなものでしょうか？

特定の臓器・疾患に特定せず、総合的に患者さんを診ます。何か身体に症状があったときに、「病院で診てもらいたいけど何科に行けばいいのかわからない」という経験をされたことはありませんか？病院は専門の診療科に分かれています。例えば「胸が痛い」という症状があったときに循環器科にいったらよいのか、呼吸器内科か、それとも整形外科にいったらよいのか、適切な判断をすることは簡単ではありません。また、確かに症状はあるのに色々な検査をしても異常は見られず、結局ストレスのせいとされたり、心療内科・精神科の受診を勧められたりと、原因が分からず不安な思いをされた方もおられるのではないでしょうか？そんなときには総合診療科を頼ってください。専門医は症状を診て、診断基準にあてはまるかどうかで判断しますが、総合診療科では病気自体ではなく、患者さんに何が起こっているのかを診ます。患者さんの気持ち、普段の生活環境、人間関係、性格、職業などの背景を読み取り、身体的、心理的、社会的側面から総合的に判断します。患者さんのお話を聞いてみると、本人でも気付かないようなところに原因があることがあります。それを豊富な経験と知識に基づいて診療していきます。病名を見つけるのではなくその方自身を知り何が起こっているかを診ると自ずと原因がわかってきます。総合診療科で治療・処置を完了することもあれば、原因を特定した上で専門医へ紹介し、最適な治療を勧めることもあります。専門医では疾患が専門外の場合、判断することが難しい場合もあります。特に高齢になると症状は慢性的で、複数の診療科目にわたっていることも多いです。様々な病院や他科を受診され、検査の結果異常なしと診断された方が、総合診療科に来て、原因がはっきりしたという事例は数多くあります。

なぜ新設されたのですか？

地域医療の充実のためです。医療を受けるとき、在宅医療、入院、外来などの方法がありますが訪問看護、ケアマネジャーとの連携が難しいことが課題となっていました。そこで地域の中核病院に総合診療医が入ることによって、地域の医療と個人の状態を把握し、各関連医療機関と連携して、グループで支える仕組みをつくりたいと考えています。

今後の展望

総合診療は特に地方や医師が不足している地域、高齢化が進んでいる地域でこそ求められています。特に奈良県では東和地区の医師不足が深刻です。奈良県立医科大学附属病院では、はじめは、一人で総合診療科を担当していました。少しずつ病床、医局員が増え、今では39人となりました。医局員は私にとって家族のような存在です。現在の総合診療科は奈良県立医科大学附属病院の総合診療科から派遣されている医師で構成されています。彼らに今後も指導を継続していきたいと思います。総合診療医の充足が地域医療の充実に繋がります。

宇陀市立病院
地域医療支援センター長
西尾　健治

自治医科大学卒業

奈良県で地域医療に9年間従事。小児科専門医を取得。

奈良県立医科大学で救急科の講師に就任し、11年間従事。救急科専門医を取得。

1998年 榛原町立榛原総合病院小児科部長。

2000年 ワシントン大学へ研究留学。

2005年 奈良県立医科大学高度救急センターにて准教授として着任。

2011年 総合医療学講座へ移り、奈良県立医科大学附属病院副院長、教授を務める。

多くの災害診療にも携わり、日本・海外の災害地へ派遣。

地域に愛される移動診療車

病院診療、移動診療の充実

令和元年10月に「地域医療部」を開設しました。

宇陀地区医師会からもご理解をいただき、まずは訪問診療を開始しました。複数医師チームによる訪問診療の質を担保するため、ITで情報共有しつつ、病院外の関係者も交えて週1回の検討会を開催しています。訪問診療の患者さんが入院した場合には、病棟看護師とも密接な連携をしています。

令和4年5月には移動診療車を運用開始しました。X線撮影装置を備えた移動診療車は、おそらく日本初です。見方を変えれば、国内で試みられたことがない困難な事業とも言えます。広い市域に集落が点在する市にとって、貴重な戦力となります。一般診療のみならず、健診事業や予防接種、発熱外来など、すでに積極的な活用を開始しています。常設診療所にはない機動性を生かして、今後も医療活動を展開していきます。

移動診療車だけが充実しても、市民の付託に応えられません。病院診療、移動診療車の両方を充実させ、「宇陀に住んでいてよかった」と市民の皆さんに思っていただけるよう、健康と安心、そして幸せをお届けしていきます。

宇陀市立病院の診療科紹介

市立病院は、次の診療科を持つ病院です。

①内科外来（ペースメーカー外来、腎臓外来、禁煙外来、ワクチン外来）
②総合診療科
③外科
④婦人科
⑤整形外科（肩肘センター、ペインクリニック外来）
⑥耳鼻いんこう科（補聴器外来）
⑦眼科
⑧皮膚科
⑨脳神経内科
⑩泌尿器科
⑪小児科
⑫麻酔科
⑬精神科

以上の診療科を有し、5年平均年間のべ約9万人の外来患者さん約4万8千人の入院患者さんに来院いただいております。

特定検診・がん検診、人間ドック他紹介

市立病院は、次の検診等を行っています。

①各ご加入の保険による特定健康診査
②各がん検診（大腸がん検診、乳がん検診他）
③各ドック（日帰り人間ドック、心臓ドック等）
＊各科での診察や各検診については市立病院までお問い合わせください。

問 宇陀市立病院（☎82・0381）

タイからの留学生5人が看護助手として活躍中

奈良市都祁にあるHAYAMAインターナショナルスクール在席のタイからの留学生が看護助手のアルバイトとして市立病院で働いています。元気で一生懸命な姿に職員や患者さんからも大変評判が良いです。内2人は4月から宇陀高等学校の介護福祉学科へ通われています。

Q.どうして日本で看護助手のお仕事をしようと思ったのですか?

タンタイさん:タイでも高齢化が進んでおり、医療系の施設や職員が不足しています。看護師、介護福祉士になったらタイでも助かるだろうと思いました。

オイルさん:昔から医療系の仕事に就きたいと思っていました。タイでも日本と同じように少子高齢化の傾向にあります。高校生のときから日本語は学んでおり、日本で課題を解決する助けになりたいと思いました。

ゲートさん:家族に医者や薬剤師がいて、その様子を小さい頃から見ていました。日本にはこれからも住みたいです。介護福祉学科で学んだ後は、看護師を目指したいと思っています。

ヌックさん:祖母と一緒に住んでおり、将来は医療系の仕事をしたいと思っていました。高校生から日本語を勉強していますが、タイでは日本語を使う仕事は翻訳・通訳者くらいです。それらにはあまり興味がありませんでした。日常会話は大体わかるので、今度は病院で使う専門的な言葉を学んでみたいと思いました。

ケーキさん:大学生のときから人を助けることが好きでボランティアや寄付活動をよくしていました。弟はアメリカで医学を学んでいます。私はもともと日本の文化・社会・日本人が好きなので、日本で人を助ける仕事をしたいと思っています。

Q.患者さんと接する中で気を付けていることや大切にしていることはありますか?

ヌックさん:話す言葉が失礼にあたらないかを気にしています。

ケーキさん:介助するときに、力加減が強すぎないか気を付けるようにしています。自分基準ではなくて、患者さんにとってどうかと考えるようにしています。

ゲートさん:手術後の患者さんを担当していることが多いので、術後の箇所に触れてしまわないように気を付けています。あとは患者さんの気分が少しでも晴れるように、積極的に声掛けをしています。

オイルさん:丁寧な言葉を使うようにしています。うっかり関西弁が出そうになります。(笑)僕も介助するときに患者さんの傷に手などが当たってしまわないように気を付けています。

タンタイさん:部屋に入ったときに笑顔で声掛けをして、患者さんが不安に感じないようにしています。特に個室の方や高齢の患者さんは寂しさや不安感を抱いている方が多いので、声掛けをしたり、手を握ったり優しくさすったりします。少しでも元気付けられたらと思っています。

看護部長　山内　麻里子さんは

「看護師の多忙な業務の傍らで、留学生達は、笑顔一杯で高齢者に接し、元気づけてくれています。「待ってたよ」と言われるまでの存在になってきました。看護師とのコミュニケーションも良好で、わからないことはすぐに聞いてくれるので、安心して業務をお任せできます。患者さんにとっても、看護職員にとっても留学生は〝癒し〟を与えてくれています。これからも一緒にがんばりましょう!」と話され、いまは宇陀市立病院にとって、なくてはならない存在になっています。

温かい思いやりをもって、いつも前向きに業務に取り組まれている皆さん。これからも活躍に期待です。

タンタイさん
好きな食べ物:寿司
日本に来て驚いたこと:真夏に日傘をしている人が少ない

オイルさん
好きな食べ物:牛丼
日本に来て驚いたこと:挨拶の種類が多い

ゲートさん
好きな食べ物:つけ麺
日本に来て驚いたこと:飲食店やテーマパークで行列に長時間並ぶこと

ケーキさん
好きな食べ物:天ぷら
日本に来て驚いたこと:満員電車

ヌックさん
好きな食べ物:ラーメン
日本に来て驚いたこと:ATMで硬貨も使えること(タイではお札のみ)

INTERVIEW

宇陀市立病院　病院長
仲川　喜之

■ プロフィール

1988年	榛原町立病院整形外科医員
1993年	同、整形外科医長
1998年	同、整形外科部長
2006年	町村合併により、病院名、宇陀市立病院に改名、同、整形外科部長
2010年	宇陀市立病院、副院長兼整形外科部長
2013年	宇陀市立病院長、現在に至る

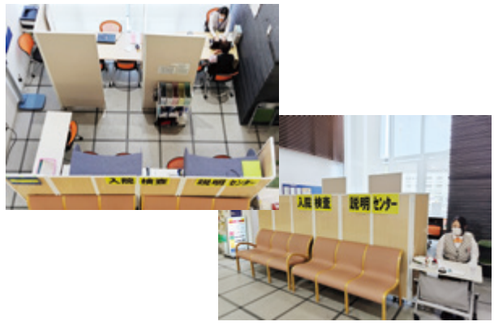
病院づくりは街づくり

「地域の皆さまに愛され、支援される病院」、「地域の誇りとされる病院」、「職員が誇りをもって楽しく働ける病院」を目指しています。その取り組みの一つとして、宇陀けあネットがあります。宇陀けあネットはICTを活用した医療と介護情報サービスで、宇陀市内の病院に診療を受けられている方を対象としています。お体の調子や飲んでいる薬、健康診断の結果、介護サービス情報などを各関係機関で共有することによってより効率的に、質の高い安心したサービスの提供を受けることができます。現在、参加施設数は88施設、登録者は7700人を超え、市内の65歳以上のおよそ半数が登録されたということになります。登録料は無料です。例えば各医療機関に初診や救急搬送された場合でも、患者さんの医療介護情報が医療機関へ正確に伝達できます。また検査や処方薬の重複が予防でき、医療費の節減にもなります。このシステムを導入するにあたって、もともと市では医療と介護、病院と医師会の関係がしっかりしており、協力的な体制があったからこそ、他の地域よりも早期に立ち上げ、運用することができました。ご登録がまだという方はいざという時に備えて、ぜひお早めにご登録ください。

市民の皆さんへ

市では高齢化率が43%に達しています。平均寿命は延びる一方ですが、健康寿命とのギャップがあります。介護を必要としないこの健康寿命をいかに延ばせるか、取り組んでいく必要があります。その一環として、当院ではさらに専門医を充実させ、総合診療医を増やすことによって、地域の医療を広く診ることができるようになります。現在、医療、生活、経済面を含む相談窓口を設置し、通院・入院に際してのご相談をお受けしています。特に、ご高齢の入院患者さんに対しては、日常生活能力や認知機能、意欲についても総合的に評価させていただき、病状把握、早期治療、早期退院に努めています。退院後も治療・リハビリが必要な患者さんで、通院・通所が困難な患者さんには在宅診療、訪問リハビリのサービス体制も整えております。「在宅診療」、「訪問リハビリ」をご希望の方は、かかりつけ医師もしくは当院地域連携課にお問い合わせください。今後も地域に密着した「面倒見のいい病院」として取り組んでいきます。引き続き、市民の皆さんのご協力・ご支援よろしくお願いします。

4月から玄関ロビーに入院検査説明センターを新設しました

患者さんが安心して入院・検査を受けていただくための支援を行います。

入院前の状況を伺い、DVD等を使い治療や入院生活についての説明を行う事で入院生活や治療がどの様に進められるか患者さんに分かりやすくイメージしていただけるようにします。